


 書評

福本修, 斉藤環編

精神医学の名著 50

衣笠隆幸

日本における現代精神医学は、最近の向精神薬と脳生理学の急速な発達によって、生物学的精神医学の潮流が中心になっている状況が見られる。また、それに拍車をかけたのは、医療保険制度の矛盾など精神科医療体制の問題だけでなく、DSM-IVなどの簡便なチェック項目による操作的診断の普及であろう。

しかし、実際の臨床現場においては、精神病などの複雑な臨床症状を理解するためには基本的な精神病理学の素養が必要であるし、地域精神医療などの重層的な実践的理解をするための心理社会的指針が必要である。また各種パーソナリティ障害などの治療においては、無意識的内的世界の理解など、患者個人の固有の生活史に基づく力動的理解が必要不可欠なものである。

その場合に、精神科研修医達は良質なテキストブックを必要としているが、基本的で全般的な分野にわたるリーディングガイドブックは十分なものは存在していなかった。ここにそのような研修医の要求に応える大変充実した必読書のガイドブックが誕生した。

この「精神医学の名著 50」のカバーしている精神医学の分野は幅広いものである。その目次を見ると、1) 精神病の理解のために、2) 現代精神医学の源流と課題、3) 様々な領域での発展、4) 精神分析とその展開、5) 様々な治療的アプローチ、の各章において代表的な著書を50冊紹介している。この各著書と数十名の解説者の選択に関しては、編者を中心にその分野における経験と知識のある専門家が推薦していて、充実したものになっている。そして各解説者は、自分の担当した著書に関する重要性和特徴を、解説者自身の理解のエッセンスを簡潔に

明記することによって、その著書の特徴と固有な内容の豊かさを示している。

そこでは、30年ほど以前、評者が研修医の時代によく読んだヤスパース、フロイト、エー、ミンコフスキー、ビンズワナーなどの著書は紹介されていないが、この著書の目標はそれらの古典的なものは前提として、主として現代の潮流に即したものを紹介しているのである。また現代精神医学の源流としてカーンバーク「境界状態と病理的自己愛」、パトナム「多重人格障害」、ハーマン「心的外傷と回復」が紹介されているのは現代日本の臨床の推移をも反映しているものであろう。さらに福本氏の専門分野である精神分析においては、対象関係論、ラカン派、自己心理学など現代精神分析の代表的なものも多く紹介されている。このようにこの著書は、現代に生きる精神医学必読書ガイドとしての面目躍如たるものがある。

編者の福本修氏は評者の旧来の友人であり、彼の精神病理学の世界における博識と精神分析的な素養の深さはつとに知られている。また斉藤環氏は「ひきこもり」の臨床的研究者としてよく知られた真摯な臨床家である。また繰り返すが、各解説者達は、各分野において現在活躍中の優れた専門家である。

この著書は、研修医にとっては最高の基本的テキストの案内書であり、各著者による解説を読み、その後に紹介されている著書をこつこつと読み進めていくことを薦めたい。また経験ある臨床家も、もう一度初心に帰ってそれらの著書に目を通されることを勧めたい。

(広島市精神保健福祉センター)

● 四六判 562頁 2003 本体3,500円 平凡社刊